

村木 厚子 氏とのWeb会議（施策構築に向けた勉強会） 概要

■開催日時

令和3年（2021年）7月12日（月） 15:30～16:45

■開催場所

WEB開催（事務局は、滋賀県公館ゲストルーム）

■出席者

村木 厚子 氏（元厚生労働事務次官）

三日月知事

中條副知事、川崎 総合企画部長、市川 健康医療福祉部長

企画調整課職員、障害福祉課職員

■内容

（知事）

今日は、事前にどれだけお話し出来たかわからないんですけど、コロナも経験しながらですね、是非危機を転機にしたい、いろんなことをよりよくしていく好機にしたいと思ってまして、ぜひ県庁内で施策づくりする前にいろんな方のお話をお聞きしてですね、県版の骨太じゃないですけど、少ししていきたいなという思いで、お時間いただいております。

最初私のほうから県の考え方なり取組をお話した上で、村木さんのお話を聞かせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。画面共有させていただきます。

「かわる滋賀 つづく幸せ」というのが今、滋賀県の基本構想の基本理念なんです。それで、特にコロナ経験してますので、今のテーマは「健康しが」なんですけど、「本当の意味での健康しが」をつくらうとしてます。その「健康しが」は何で構成されてるかといいますと、人の健康、社会の健康、自然の健康、この三つの健康を保つ、高めようということを皆さんに呼びかけています。

人の健康の面では、平均寿命は滋賀県高いので、それを健康寿命と（の差を）縮めて、さらに自分らしく、自分の天寿を全うできるような、そういう滋賀でありたいね、そのために、いろんな民間の力とか、データの活用とか、そういうことを充実させたいし、何より、やっぱり次の世代を育てることにもっと社会の力を注いでいこうよ、また、文化とか芸術とか音楽とか、そういうもので何かこう、わくわくできるようなそういう滋賀をつくらうというようなことなどをやってます。

社会の健康の面も広いんですけど、特に公共交通とか産業振興とか、村木さんにもいろいろお世話になって、一番下の共生社会の取組はですね、やはり福祉先進県滋賀として、頑張ってるんす。障害者差別のない共生社会づくり条例を、2018年度に整備しましたので、そのための具体的取組を充実させたり、農福連携も、今頑張ってるんす。単に、仕事する人いないかなあ、障害者の働き場所ないかなあということだけではなくて、やはりそれぞれの地域課題を克服するためのテーマとしても、私はこの農福っていうのは大いに活用できると思っ

てますのでそういう視点でさらに充実させようと。あとは再犯防止ですね。これはもう村木さんともいろいろディスカッションをさせてもらってますが、繰り返し犯罪に手を染める加害者も被害者もふやさない、そういう取組をしたいと思います。その意味では、村木さんがやっただきっている若草プロジェクトなども、ぜひ滋賀県としてもより連携して、やれたらいいなあということを思っています。

自然の健康の面では、こういった形で、私たち琵琶湖をお預かりしていますので、琵琶湖を真ん中に、まわりの山々の健康を高める取組などをやっているところです。

それで、コロナまだ収束が見えてませんが、これからやっぱり10年間ですね、2030年に向けて着実に、やはり人の健康、社会の健康、自然の健康を減じるのではなくて高める方向に施策をつくっていききたいということで、特にこの①から④、コロナ禍を経験してこの4つのことに少し力点を置いた施策づくりを来年度したいと思っています。

順番に簡単に言いますと、まず、こころの健康の面では、この感染症やっぱり一つ一つの距離を離そう、出るな、遊ぶな、っていうのが強いので、メンタルヘルスのケアをする取組ですとか、こういうときだからこそ地域コミュニティのつながりの確保、そして、オリパラがどうなるかわかりませんが、文化芸術、スポーツに触れる機会の確保、何より、医療保健システムの強化ですね、こういうことは非常に重要だと思っています。

ちなみに申し上げますと、一昨日から県のワクチン接種を広域で始めたんですけど、打ち手が足りないということで、潜在看護師の方手伝ってくださって呼びかけたら600人を超えて、お手助けいただいていますね、今その方々が現場で大活躍し始めてくださっています。ぜひこの方々を、単にワクチン接種だけじゃなくて、地域福祉の担い手としてですね、少し頑張ってもらえるように研修をしたり、いろんな働く場所をマッチングしたりしていきたいなあということも今考えてるところです。

次のところは、やはりコロナ禍のしわ寄せが次世代にいつているという危機感を持ってまして、学校が休みになるとか、いろんな機会が失われるとかですね、ぜひ次世代・子ども施策を充実させていきたい。生まれてくる子どもの数も減ってきてます。単にそれをふやそうということではなくて、せっかく生まれてきた一人ひとり、そして子どもを授かったお父さんお母さんをもっとみんなで支えるようなそんな仕組みをぜひつくっていききたいなあと考えているところです。

次のこのあたりは、いろいろ産業政策や関係人口のところなので、今日は少しとぼしますけど、ツーリズムの関係は、新しいニューツーリズムを滋賀でつくろうということなども今展開しているところです。

そして、これも環境の施策で、最後に特徴的な取組を3つ御紹介して終わりますね。

あと、この四つの柱を貫くテーマとしては、人づくりと、デジタルトランスフォーメーションと、「国に言われてやるんじゃなくて自分たちのことは自分たちでやろう」という、よりよき自治の創造というのを今、皆さんと一緒に掲げているところです。

最後に3つ、琵琶湖版SDGsをつくりました。これはマザーレイクゴールズって言って、身近なところから、自分たちの、特に自然環境をよりよくするためにどんなことをすればいいのかっていう

ことをつくって、取組を始めたところです。国連のマークとは違って日本の伝統食で色をつけて、この7月から、今本格的に発信し始めたところです。若干ちょっと社会的包摂のところですね、誰一人取り残さないっていう部分がこのマザーレイクゴールズには入っていないので、環境的な側面が強いので、この辺りをどうこれから充実させていくのかっていうのは一つの課題だなと思っています。こういった形で今、皆さんに呼びかけて取組をしております。特に若い大学生とか高校生とか中学生、参画をしながらですね、今取組を進めているところです。

そして、ちょっとテーマが変わるんですけど、死生懇話会っていうのを滋賀県で立ち上げて、亡くなった後どうなるんだろうとか、亡くなるってどういうことなんだろうとか、その前の老いとか病にどう向き合えばいいんだろうかっていうことを考える場をつくりました。行政がやるなんておかしいよ、何か固定的な方向に導こうとしてるんじゃないか、っていうそういう御懸念があったんですけど、死をタブー視せずに、せっかくある生をより輝かせたいという思いで、今、皆さんと一緒に議論を始めているところです。これまで2回懇話会やりまして、今度9月に第3回を予定しているところです。

最後になるんですけど、こんなことも含めてですね、ぜひみんなで、滋賀をつくるためにどんなことをしたらいいのかっていうのを話し合う場をつくることを大事にしてまして、審議会委員さんだけではなくて、大人だけではなくて、無作為に抽出された高校生と、「次の世代、これからの社会、どうすればいいと思う？」というようなことを、私自身も入りながら議論する場をつくっているところでございまして、ぜひ自分たちのことは自分たちで考えるっていうことを大事にする滋賀でありたいなと思っているところです。

少し長くなりましたが、こういうことを考えながら、アフターコロナ、ポストコロナを指向しながら、現在滋賀づくりをみんなで作ってるところですので、今日は村木さんのほうから少し関連することも、それ以外も含めて、御示唆お話しいただければ幸いです。よろしくお願いします。

(村木氏)

ありがとうございます。本当にすごく面白いし幅広いし、頭がやわらかく物事を考えておられるので、とっても楽しみです。特にいろんな分野、再犯防止とか最近やっていると、滋賀の場合はいろんな専門職の方とか市民の方とかが、何ていうんですかね、耕されてるっていうんですかね、活動をしてるとか連携をしてるとかっていうベースがすごくあるので、やっぱり強いなと思いますね。

(知事)

そうですか、ありがとうございます。感度・感性が高くて豊かな人、広い人が多いですね。ただ早く耕され過ぎちゃって、こうあるべきっていうのが若干強かったりするのかもしれない。今日的な課題にどう向き合うとか、その方々同士が村になっちゃって、新たな人とのつながりをどうつくるのかとか、そういうことが課題であり可能性かなあなんて今、村木さんのコメントを聞きながら思いました。

(村木氏)

直接お役に立つのかわからないんですけど、いただいた資料を眺めながら、これからのことを考えるときに見落としやすい視点とか、こういう角度からも見てみたらって思うことをちょっと整理してみようと思ってやってみたら、意図せずっていうと当然当たり前なんですけど、全部「人」視点になったので結局そういうテーマになってますけど、画面共有をさせていただいて。

「かわる滋賀 つづく幸せ」ってというのは本当に面白いなと思って、じゃあ、「つづく幸せ」について、各施策を担当する方が「こういう観点から見れてるかな」っていうのを考えていただけたらいいかなと思って整理をしました。

やっぱり一番の資産って人だと思うんで、人がどう生きるかっていう点から、幾つかテーマを考えてみたんですが、一つはやっぱり、会社だろうが自治体だろうが、人口の半分持つ女性を生かすっていう視点は、女性の担当のところだけじゃなくて、ほかのどの分野の人もぜひ考えてみてほしい。政策を考えるときに、女性をうまくこれで巻き込めるかな、あるいは若い人を巻き込めるかなっていうことを、考えてもらえたらいいなと思ってます。

女性活躍って少子高齢化ですごく言われるようになっていて、女性活躍がないと結局、負担増とか社会保障の効率化とかっていう厳しい改革しか出来なくなるので、やっぱり支え手を増やすっていう点で女性活躍大事だって言われてるんですけど、女性活躍の問題を厚労省で一生懸命議論したときにですね、結局どこへ行き着いたかっていうと結構おもしろくて、「男性の問題が解決しないと駄目だね」っていうことになって、当時、我々すごくよく眺めていた表がこれです。一番左は、国際的に見た子どもがいる家庭のお父さんの家事育児時間で、やっぱり日本が圧倒的に少ないとか、それから真ん中は、夫が家事協力すると女性の就業継続の割合が高まるとか、一番右が一番おもしろくて、男性の家事育児の協力があると2人目以降が生まれてるっていうのはっきりしたデータがあって、結局、子どものこととか子育てのこととか女性活躍を、女性に焦点を当ててやると何十年たっても進まないのかなっていうのがあって、政府は一つ働き方改革へ舵を切って男性の働き方っていうところへ行っただけなんですけど、残念ながらこれはですね、やっぱり共働き世帯が圧倒的に増えてる、グラフで世の中の構図が変わってるんだけど、これ男性と女性の育休の取得率の差で、物差しが10倍違うんですよ。一瞬見ると同じように見えますけど。だから、こここのところが変わらないと多分、世界中で出生率の高い国は女性が働いているって現実がある中で、日本はそこへは行けなくてどっちか選びなさい、といつまでも言っている国になっちゃうんで、思い切って男性のところへ切り込まないと恐らくこの問題解決しないかなっていうふうに思ってます。これは多分暮らしの部分なので、自治体でできるところってというのが実はすごくあるんじゃないかって思います。

もう一つはやっぱり、少子化っていうことでいくと、妊娠出産、それでネウボラなんかで妊娠期からの問題をしっかりサポートするっていうことが出てくるんですけど、厚労省でもう十数年、虐待で子どもが死んだケースを、専門家がいて、誰かを責めるんじゃなくて何があったんだっていうのを調べるっていう調査を地道にやってるんですけど、年間で数十件の虐待死が必ずあるんですけど、3分の2が0歳児で、そのうちの半分が0か月児なんですよ。圧倒的に子どもが死んでる

のって 0 歳のときで、生まれてすぐ殺されてるっていうケースが多くて、大きな原因がやっぱり親の養育能力がもともと低い、さらにその前にいくと望まない妊娠っていうのはすごく多くて、あるいは予期せぬ妊娠ですよ。ですから、子どもを幸せに産む、それから、育てる力がないときとか、みたくない相手の子どもは産まないっていう、若い人を守ってあげる仕組みのところから、多分虐待対策っていうのは始まるんで、若者支援とか子どもの教育のところから本当はスタートをしてる。これがちゃんとして、望まない妊娠だったら中絶っていう手段もあるし、逆に、ちゃんともらってくれる養子縁組の制度もあるよということとか、いろんなことを自分の体とか性とか、愛する人と子どもを設けることを大事にするっていうようなことがもうちょっと進むと、根本的な少子化と虐待ってこのあたりからスタートするのかなって思います。だから、安心して、望んで産むっていう環境をいかに整えてやるかっていうところを、少し踏み込んで考えてもいい時期まで来てるかなっていうふうに思ってます。この報告書は毎年出ますので是非関係者の人は見ていただくととても役に立つと思います。10 代の妊娠なんかの問題も含めて、役に立つ報告書になってます。

その関係でいくと、やっぱり子ども・若者をめぐる状況が大変厳しい。これは意外に、大人はそうは思っていない。若い人たちの現状と大人の意識にかなりギャップがあるので、ここは特に自治体としては、もう一回再認識をしておいてもいいかなって。やっぱり相対的貧困率がすごく高いし、一人親家庭の 2 世帯に 1 世帯を貧困の状況に置いてる状況がこの国にあるっていうところは、やっぱり何かの形でもう一回自分たちに問いかけなきゃいけないかなって。せつかく産んで育ててくれる人がこんな厳しい状況にあるっていうところは、課題かなあと思ってます。

非正規が多いし、これからぜひ強化してもらいたいと思ってるのが、虐待がふえていて、このグラフは皆さん見てるんですけど、こちらのグラフで、例えば 16 万件虐待の通報があって、一次保護が 2 万 5000 件で、結局施設入所とか里親委託は 5000 件なんで、3%なんですよ。ほかの子は家にそのまま残るわけで、親子の支援、家に残った子の支援がとっても弱いっていうことと、それから、見つけられてない虐待があるっていうことと、児童福祉が 18 歳で切れるっていうのは、自分が担当してたので本当に言うのも恥ずかしいんですが、非常に児童福祉がやっぱりまだ弱くて中途半端。特に 18 歳から、大人だからあとは 1 人でやりたまえという、非常に冷たい制度になっていてですね、20 歳 22 歳まで、自立援助ホームにいられるはずなんですが、自治体によってものすごく差があって、原則 22 歳まででみんな大学行きたい子は行くんだってやってる施設があるかと思えば、ほとんど機械的に切られてるところもあるので、この辺やっぱりしっかりやっていかなきゃいけないかなあって、せつかく見つけた虐待なので、最後まで面倒見てやらなきゃいけないかなあと思ってます。

若草(プロジェクトを)やってみて本当に若年者って厳しい状況にあるなあって思ってたんですけど、去年のコロナで 4 月末ぐらいから相談急増で、年齢層は 18 歳 19 歳と 20 代前半ぐらいでした。典型的な相談は、1 か月バイトのシフトが入りません、収入ゼロですっていう系統の相談と もう一つは、ステイホームで家にいなければならないので、居場所がありませんっていう相談。シッターパンクして、あちこち探してそれこそお寺とかいろんなところに間借りをしたりしてですね、保護をする子も出てきましたけど、逆に保護した子たちが何人か大学進学していきました。サポー

トさえあれば非常に力を持っている子たちが困った状況でいるっていうふうに思います。

さっき健康問題が出ましたけど、同じような活動をしている子どもシェルターとかDVシェルターとか、児童養護のアフターケアのところへ呼びかけて、今ネットワークの緩いのをつくって、試しに6施設だけ「医療費を15万円だけ提供しますから何にでも使ってみてください。保険がきかないとか、自己負担の大きい医療費に使ってみてください」って言ったら、7割が精神科でした。残りが産婦人科もありましたし一般医療もありましたけども。やっぱり若い人対策のところ、スタートラインに立ててない子どものことっていうのは考えてあげたらいいなって思います。

それから障害は、おっしゃったように、まだ働ける障害者たくさんいますし、賃金が大変低いので、農福はこれから面白いと思います。農福で成功してる場所は全部、障害者が入ることで人手が出来て、農業が高収益高付加価値になって、周りの農家を巻き込んで地域全体が元気になってるっていうパターンが多い。つまり、かわいそうだから雇ってあげるじゃなくって、障害者が入ることで地域が全く変わっていくっていう成功例が、本当に増えたなあと思っていて、昨日長崎行ってきましたけど、給料14万から15万払ってました。畜産と農業で。東京の三つ星レストランにブランドの鳥とか野菜とかを出荷ということで、それだけ稼いでましたね。さすがと思いました。ノウフク・アワードっていうのを去年初めてやって、受賞してるところが一つ一つ全部面白いんで、もし関心がある部局の方はこの辺りを研究してもらおうと面白い知恵がたくさんあるんじゃないかなあっていうふうに思います。

それから、健康がメインなので、健康について私が最近どうしたらいいかなって、孤独・孤立対策の参与になったのですごく悩んでることを、皆さんと共有してと思ってるんですが、私厚生労働省にいたときに、事務次官だったときに、医療とか健康対策の担当者が来て、何センチもある資料で、これからの健康対策こうやりますって言った後に、ぽつと担当者が、「いや、でも本当の最良の健康対策は生涯現役なんですよ。それに勝る健康対策はありません」って担当部署が言っていて、この話は、「健康日本21」の最初の10年が大失敗だったときの反省の話で、「栄養バランス、よく歩く、認知機能を高める、自分の健康に自信を持つ」っていう4本柱でやって全くうまくいなくて。これをお医者さんが解説してくれたのは、「車にガソリン入れて、よく整備して、性能のいいカーナビつけて、運転技術もばっちりだ。5番目に足りないのは、行くところがなかった」っていう。結局何をするかっていうのは、やることあるかどうか、出番があるか、行く場所があるかっていうことだっていうふうに言われていて、5番目の柱で社会活動みたいな柱を入れてから、成果が上がり始めたって言われています。

2040年を目指した厚労省の社会保障の計画・展望で、やっぱり就労社会参加がまず出てきて、健康寿命が出てきて、医療サービスの効率化、IT化・DXが出てくるっていう、これがもう本当に、よく表していると思います。

いろんな、高齢者も含めて、参加のつくり方はあると思うんですけど、これは秋田の藤里町なんですけど、高齢化率がもう50%近い中で、町民のボランティア参加率1割っていう恐ろしい町なんです。シルバー人材センターの上に行くためにプラチナバンクっていう名前がついてますけど、これは仕事や活動をやってみたい人が出すアンケートなんですけど、収入はどれぐらい欲しい、仕

事時間はどれぐらいできる、やる気はどこまである、経験はどれだけあるっていうのを全部4段階で登録をして、デイに行ってもデイに行った場で仕事ができるっていう仕組みになってるんです。これをやると人口の1割がボランティアをやってるっていう状況まで持っていけるっていうことで、多分健康対策の鍵になってくるかなあと思っています。

それに関連して、行くところ、会いたい人がいないと孤独になるっていうことが、健康対策やってみてわかったんですが、その原因が何かっていうことですね、孤独の担当室で、高齢者ひとり暮らしは孤独、ひきこもりは孤独、何とかは孤独ってさんざんやった最後に、担当者が何て言ったかっていうと、「でも自殺率が一番高いのは中高年男性ですよ」って。データはそのとおりなんですけど、これは2017年に出たNHKの関連のところがやった国際比較の調査なんですけど、友達の数が、男性がですね、社会人で働いている間にどんどん友達の数が減って行って、高齢期にひとりぼっちになってるんです。女性はそういう年齢変化がないんです。現役の間、別に減らない。だから、会社人間ってよく言いますが、本当にこのデータが表している、1人になって今度は退職する。完全な孤独でこのとき妻との人間関係がいいと妻が生きている間は健康、家族がいなくなると不健康って、こうなってる。もし健康対策とか孤独・孤立、ここに何か焦点を当てて出来たら、ものすごくもしかしたら面白いことができるかもしれないっていうふうに思ってます。

あとは、刑務所のところについて、出所者をどれだけ社会で受け入れられるかで、もうこれに尽きると思うんですが、今までは前科はつくけど治療や福祉に結びつかない刑事司法だった。これを治療や福祉に結びつく刑事司法で入口出口支援をやるっていうことと、受け入れる側の地域と福祉担当、医療担当、教育担当、就労担当が、「うちには来ないでくれ」じゃなくて、「見つかってくれてありがとう」と言えるかどうかだっていうふうに言われていて、この「見つかってくれてありがとう」は非常にいいセリフで、逮捕されたことでこの人が困っていたということがわかったから、これからはちゃんと福祉も医療もあなたを支えますよ、地域が支えますよっていうふうになるっていう。この辺までやれると本当に、高齢者だろうが障害者だろうが女性だろうが、みんなの力を上手に使えるっていうところに来るのかなあって思ってます。

孤独・孤立で言うとやっぱり、自立、人様に迷惑をかけないっていうところの考え方を少し変えて、いろんな人に頼ってみんな暮らすっていうことと、自分ができることはいろんな人を助けるっていう、この感覚って多分滋賀ではすごく受入れてもらいやすい土壌があるので、これがあるとみんなが自分のできることで活躍して、みんなつらいことはちゃんと早く表に出して助けてもらう。そうすることで、恐らく相当強い社会ができるかなあっていうふうに思います。役所の人は真面目なので役所として何ができるかって考えがちなんですけど、SDGsもパートナーシップでやるっていうことなので、この絵の右側、行政ができること、企業ができること、第三セクターができることっていうのを、みんなが強みを生かしてやる。構成員は全員市民でしょっていう、これってとってもいい考え方だと思うんで、具体的な政策を考えると行政は何やるかっていうだけじゃなくて、ほかの人に県民に何をやってもらうとかということと一緒に考えると、一緒につくっていくと、結構面白い、今までにない政策ができるかなと思います。長くなりましたけど私からの提案は以上です。

(知事)

ありがとうございます。「つづく幸せ」を考える際に、ちょっと忘れてしまうというか見落とされがちなところを、いろんな角度から御指摘いただいて、みんな一同、あれもこれもとメモをとりながら聞いたところなんですけど、どれも膨らませていったらいい、ディスカッションしたらいい話なんですけど、実は最初におっしゃったジェンダーの視点は、特に今年度以降、県庁内のあらゆる部局で、ジェンダーの視点で考えようじゃないか、見ようじゃないか、変えようじゃないか、ということに、まず組織目標の中に入れて、今やろうとしてるところです。まだ具体はこれからなんですけどね。この視点から出発するっていうのは私もとっても大事だと思ってますね。

(村木氏)

私は民間企業で社外取締役をやってるんですけど、面白い出来事がありまして、各部局から代表を出してこいって言ったら全部男性になっちゃうんですよね、企業さんも。2人にして、できるだけ男女ペアでって言って、男女半々になる会合に変えちゃったんですよね。そしたらやっぱり出てくるアイデアとか、あるいは本音が出るまでにかかる時間とかが全く違うんですよね。すごく新鮮でおもしろかったですよ。女性が入ったほうが本音がすごく早く出て、いい会議になりました。

(知事)

でしょうね。実は「かわる滋賀 つづく幸せ」って面白いですね、と村木さんに評していただきましたけど、これをつくった審議会もごろっと変えたんですよ。当然男女比もそうなんですけど、いろんな肩書持った方の寄せ集めではない場で議論していただいたんで、ああいう、一人称で考える、そういうメッセージになったんで、おっしゃるとおり、会議や場の作り方から変えていかないと、出てくるものも変わらないというのはそうだなと思いますね。ちょっと意図的に変えてみる、少々無理してでも変えてみるっていうところから、始めてみないといけないなと思ってんです。何かやっぱり、おっしゃるとおり、代表者出てくださってっていうと、みんな男性ばかりになっちゃう。県庁の幹部もそうなんです。だんだん変わってきましたけど、まだまだ男性中心で。

(村木氏)

そうですね、偉い方はやっぱり男性が多いですもんね。

(知事)

ただ、入ってくる若手の職員、新採なんかはもう、(女性が)半分近くになってきてるので。ポジティブアクションなんかもやりながら、意思決定層を大きく変えていかないといけないなと思っています。

あと、望まない妊娠というところから、児童虐待のことをもっと考えてみたらどうだっていうのは、早速滋賀県でも考えてみますよ。大事ですよ。

(村木氏)

そうですね。妊娠期からって言うてくださってるんで、その前の「幸せな妊娠」につながるような形になると、なおいいですよ。

(知事)

そうですね。私なんかも大学生になる娘と、自分が愛する人とそういう性の問題語ったり交渉をっていうのを、けっこう男親で語るのって勇気がいるんですけど、やっぱりこういうことをいかに社会全体で語っていくかですよ。

(村木氏)

そうですね。数日前に、「Let's talk!」っていうイベントがあって、日本でサンリオさんが主体になりながら、もともとは国連の人口基金が何かの行事らしいんですけど、性とか、妊娠とか、女性の健康っていうことをもっとオープンに話そうっていうもので、たぶん動画がもうすぐ出るんじゃないかと思うんですが、高校生とか大学生のスピーチの募集もやって、審査・表彰もやったんですよ。ああやって若い子たちがその問題に参加をして自分でしゃべる。それから国連の「Let's talk!」の大使みたいな、どこかの国の美しい若いモデルさんのスピーチもとってもよくてですね、受賞した大学生の女の子のスピーチがものすごくよくて、やっぱり生理とか妊娠とか出産とかあるいは性とかっていうのは、隠さなきゃいけないってずっと教えられてきた、それがたしなみだって教えられてきて、ノルウェーに留学したら、大学の寮で男子生徒・女子生徒全員で、生理用品を寮の運営費で買うかどうかっていうのを大議論をして、買いましょうっていう結論になって、カフェテリアに生理用品がどんっと入口に置かれたと言って、これは何なんだ、自分が隠さなきゃ、見せちゃいけないと思ってきたカルチャーとノルウェーのカルチャーを比べて、「もうちょっとだけ勇気を持ってオープンにしよう」っていう話をスピーチでやってくれて、とってもよかったんですよ。

(知事)

オープンにすることって今は勇気いるのかもしれませんが、とても大事なことだと思います、私も。今、滋賀県議会開会中なんですけど、本会議場で生理の話をしてくださった議員さんがいらっやって、その方も質問の前におっしゃってました。すごく私たちの年代では、勇気要ることなんですって形でですね。国際感覚のある若い世代っていうのは、いろんな機会に触れて、そういったところがよりオープンになってるのかもしれない。

(村木氏)

そうですね。障害とか虐待の話を、知事とかいろんな方が、目立つ方がちょっとオープンに言っただくとですね、その話があると必ずそのあとにカミングアウトする人がたくさん出てきて、楽になっていくっていうのが起こりますよね。

(知事)

そうですね。ひと昔前だと自分の病気のことなんか、なかなか言えないという雰囲気があったんですけど、最近、病と闘いながら仕事してます、癌と闘ってますっていうのも、比較的、言えるようになってきましたね。

(村木氏)

そうですね。

(知事)

そういうことってやっぱりすごく大事ですよ。弱みを弱みとしないというか、違いとして認め合ってる、みんなで頑張っていく、支え合っていくっていうのができればいいなと思いました。

せっかくの機会なんで、あと 20 分 30 分ぐらい、いいですか。

(村木氏)

大丈夫です。

(知事)

今日いろんなメンバーもいるので、聞いてみたいなあっていうメンバーから質問をさせてもらおうと思います。どうですか。て言うよね、大体みんなシーンとするんですよ。障害福祉を担当している職員がいますんで、そこから、はい。

(障害福祉課 職員)

先生のレジюмеにある、「犯罪は川下」「川上から川下、どこかで引っかかる社会を」「引っかかるには力がある」の「引っかかるには力がある」のところを、具体にお聞きしようと思ってたんですけど。

(村木氏)

はい、ありがとうございます。よく、赤ちゃんのときから犯罪者で生まれてくる人はいないって言いますが、「犯罪は川下」っていうのを書いたのは、さっき話した厚労省の職員が、「健康は川下」って言ったんですよ。高齢期になって急に生活習慣病とかいろいろやってもなかなか難しく、やっぱり子どもの頃からどういう食生活してきたかとか、栄養に関する知識とかいろんなことが必要で、犯罪も川下だと思っていて、学校でどういう目に遭ったかとか社会へ出てどうだったかとか、そういうことのずーっと積み重ねの中で、罪を犯すに至るということがあって、刑務所に行った人のそれまでの生き立ちを見ると、「ここで助けられたのに」「ここで見つけられたはずなのに」っていうことが何回もある。どっかで引っかかる社会っていうのをつくっていかないと駄目で、それはやっぱり福祉とか医療とか教育とか、普通の行政やってる人たちがもうちょっと頑張らなきゃいけない

いなあって思ったんですけど、もう一つ、引っかけには力が必要で、網をいくらやっても、その網をつかもうとか、投げたブイに掴まろうっていう力があるわけですね。やっぱりSOS出していいっていうことを、社会がもうちょっと言わなきゃいけない。そこへ教育もあるし、さっき言った自立の定義とか、そういうことをちゃんとやっていかなきゃいけない。本人のエンパワーメントがもちろん大事なんですけど、もう一つ、世間の温度ですね。世間の温度が冷たくなければ、誰かを頼ってみようかって言えるので、それをちゃんとやらなきゃいけないなと思ってます。

これはすごく勉強になったんですけど、岡^{まゆみ}檀^{たぬ}っていう人の「生き心地の良い町」、日本で一番自殺率の低い町にはどういう風習があるかを研究した学者の論文を一般用の本にしたものなんですけど、「病は市に出せ」という言葉があるんですね。困ってることは早くオープン、カミングアウトして、人の助けを求めろっていうことなんですけど、両側から手を伸ばし合わない、落ちてる人をつなぎとめられないので、本人にも手を伸ばしたほうがいいんだっていうのを、ちゃんと知ってもらってというのが、多分すごく大事かなって思ってます。さっきの言葉はですね、情状弁護、刑事弁護をしている弁護士さんたちの会合で出てきた言葉でした。

(知事)

おっしゃるとおり、犯罪にいたるまでに、いろんなきっかけがあるんですね。あそこで、ここで、あの人とこの人とこのところで、どう引っかかるかで、助かることってあるんですね。

(村木氏)

そうですね。だから、「うちは担当じゃない」とだけ言うのか「うちは担当じゃないけど、ここに聞いてみようか」とかね、ちょっとね、本当にちょっとしたことで、ここで見捨ててなかったらと思うことがたくさんあるんで。福祉は今、伴走型支援とか共生社会とか、地域の社会資源を上手に耕すとかっていうふうに言われるようになりましたけど、あれができると犯罪までいかなくて済むっていうことじゃないかと思えますね。

(知事)

そうですね。加害の人もいるんですけど、自暴自棄になって加害をした場合の被害者っていうものをより広く生まないためにも、早めの引っかけっていうのが大事なんですね。

(村木氏)

そうですね、再犯防止っていう言葉は嫌いな人もいるんですけど、結局、加害者が生まれなければ被害者も生まれないわけなんで、そこを、何かをやったから罰するっていう非常に単純な構造で、罰則が重ければやらないだろう、懲りるだろうっていう発想ではすまない人達が、最後に残っちゃったっていう感じですね、今の状況って。何かできるといいなって思うし、捕まることで「困ってる人」という旗が立つので、そこから起点にして動いてもらえたらいいなと思ってます。

(知事)

ありがとうございます。ほかどうですか。

(企画調整課 職員)

私、実は妻が保護観察官なんですけれども、話を聞いてると、やっぱり、日々面接などをしていくと、対象者の家庭環境っていうのはだいたい同じで、やっぱり虐待を受けて、家に居場所がなく、麻薬に手を出して、捕まっていく。それを防ぐためには、虐待を無くしていくということかなと思いますけど、お話を伺って、そもそも虐待の背景に望まない妊娠があるから、そもそも子どもを産むところから何かしていかなきゃならないんだなあというところが、非常に勉強になりました。

それは一意見なんですけど、ご質問で、今こころの健康について知事から説明した通り進めていきたいと思っていますけれども、その際にアートがどんな役割を果たせるかというところを検討しているところでございまして、今四年ぶりに滋賀県で美術館をオープンしまして、美術館に来ていただくことで、こころの健康にどんな影響があるかということを研究出来ないかなと思ってんですけども、そういった、こころの健康に与えるアートの影響というものの可能性について、もしくは実現について、厚労省で議論がされているのかということをお伺いできればと思います。

(村木氏)

はい、ありがとうございます。アートとかスポーツの果たす役割ってすごく大きいと思います。障害とか虐待とか(の担当を)やってるときにやっぱりアートの力とか、スポーツの力ってすごい力がある。それから美術館っていう場所そのものもすごく大事だと思っていて、子どもとか若年支援やってるときに、やっぱり家庭と学校しか場所がないので、そこがうまくいかないときって、子どもって居場所がなくなっちゃうんですね。子どもが安心して行ける場所とか、自分を少し出せる場所とか発散できる場所とか方法っていうのを、学校と家庭の外につくるっていうのはものすごく大きいと思います。相談ってすごくハードルが高いんですって。相談の前に、「ただ行っていい場所」っていうのがあれば、そこへ行って途中で、だんだん相談へ行けるっていう、子どもにとっては相談がスタートにはならない、その手前がいるっていうことをやっぱり担当者みんな言ってるので、居場所があり自分を表現できるアートっていう手法があるっていうのは、多分相当大きな効果があるっていうふうに思います。

そこと、誰かそういう厳しい状況の子どもとか、あるいは発達障害的なものとか、メンタルとか抱えてる子がいたときに、つなげられる専門家を上手に後ろに引っ張ってきておくっていうのがやればすごくいいんじゃないですかね。

(知事)

そうですね。相談の手前の場所、すごく大事ですよ。例えば図書館なんかもそうなるのかもしれないですね。「居ていい、行っていい」っていう、そういう場としてね。そういう意味で、アートとかスポーツという切り口もそうですし、そういうものを表現する場所、あんまりおせっかいに、

「どうなってるの？こうなってるの？」っていうのもあれですけど、じっと見ながら、「何か困ってるのかなあ」とか、福祉的な視点で見るとっていうのも大事ですよ。

(村木氏)

そうですね。公立の美術館とか劇場とかの機能なんかも最近、もっと多角化しようっていう話が進んでるって聞きましたけど、そんなふうに使えたら面白いですよ。

(知事)

面白いですし、今回再開館した県の美術館はですね、保坂健二郎氏って行って、新進気鋭のディレクター、館長に来ていただいて、むしろ子どもが来てくれと。むしろ、小さい子どもを抱えたお母さん大歓迎という形で今、皆を何とか包み込もうとしてくれてるんで、ぜひそういう中から出てくるつながりとか、育まれる感性とか、何かそういうものをね、もっともっと広く打ち出していただければいいなあと。思っています。

(村木氏)

おもしろくなりそうですね。いいですね。

(知事)

特に公園で遊んでるお父さん、お母さん、子どもたち、「ちょっと美術館寄っていかない？」っていう。ちょうど公園の横にあるもんですから、そんな仕掛けもですね、してくれてるので。ぜひそういう中で何か、相談の手前みたいなものができるといいなと。

(村木氏)

この場所があるだけで、すごく違うと思います。

(知事)

そうですね。川崎さん、何かありますか。

(川崎 総合企画部長)

はい。一緒に聞かせてもらってありがとうございました総合企画部長の川崎と申します、ありがとうございます。

冒頭知事のほうから説明をさせていただいた県の施策についてなんですけど、これからまさに来年度、その先も見据えて、何をすべきか議論をするとき、柱を1から4までお話したと思いますが、特にこころの健康の中では今日おっしゃっていただいた居場所と出番、あるいは孤独・孤立、そういうものをこの中でどれだけ考えていくのかなというのを、もう少し織り込む必要があるかなとか、あるいは女性とかジェンダーの視点というのが少し弱いかなあ、あるいは柱2の次世代の

子ども政策の中でもですね、やはりスタートラインに立てない若者、社会的養護をどう進めるのか、そういうあたりも強めていかなあかんなんて思ってるんですが、村木さんから見られてこの柱の中で、もう少し強く考えるべき点とか、抜けてる点とかありましたら、御助言いただければありがたいと思います。

(村木氏)

ありがとうございます。数年前に、G20とかOECDが言っていて私がすごく面白いなと思ったのは、いろんな人が社会の支え手になれる、そういうふうに工夫をして配慮をしてみた社会のほうが、成長が結局持続する、というふうに言ったんですよね。それはすごく私にとっては新鮮で、日本のことを考えてもやっぱりいろんな人が活躍できるっていう環境を整えていくほうが、実は弱肉強食よりも、経済成長にとっても中長期のスパンで見るといい、というのがすごく面白いなと思って、そのあとOECDの報告書が出て、格差を放置した国はやっぱり経済成長が鈍化したっていうレポートがOECDから出て、大きすぎる格差は成長の足を引っ張る。だから、やっぱり格差対策をやったほうがいいんだ。格差を縮めるときに、所得再分配的な、いわゆるかぎ括弧つきの優しい政策っていうのも、それはそれで間違っていないっていうことと、もしお金を投資するんだったら、子どものいる世帯、子ども・若者っていう、そこと、それからもう一つは、生涯勉強し続ける人たちのところに財政投資をすると、格差の縮小に効き目がわりと強いっていうのがOECDの報告だったんですよね。

これはなかなか私は面白いなと思っていて、社会の変化が激しいんでやっぱり学び続けるっていうところは片側でやっぱり応援していかなくやいけないし、あとはスタートラインに立とうとしている人たちの支援をするっていうところがうまくやれてるかどうか。結局、投票数でいうとそこが低いので、高齢者の施策ってわりと黙っていても圧力がかかってくるので、そこを見逃してないかっていうところをチェックをしていくことをやると、結構いいかなあと考えてます。

あともう一つだけ、実はこれはそのときのOECDの人からももらったレポートなんですけど、すごくおもしろかったんでいろんなところに持って行って皆さんに紹介してるんですけど、日本ってこれから発展できる可能性がある。何でかっていうと、まず失業率が少ないんで新しい技術を大胆に取り入れられる、DXやれるっていうことと、それから、AIに置き換えにくい読解力とか数的思考力が日本国民は高いので、これから日本は国際競争力を維持できる可能性がある。でも日本に大きな欠点があるって言って、真ん中の横線がOECD平均で、黒丸が日本なんですけど、左側は技術で、日本の技術は良い、1番右はスキルで、日本人のスキルは高い。真ん中が駄目でこれは何かっていうと、違う人と一緒に仕事をやってみる。日本と海外、企業と行政、研究機関と企業、とかっていう、それがとても弱い。日本はもしこれを克服出来たら、すごくまだ可能性のある国だって言われたんですよね。これがすごくおもしろかったんで私も今日の資料も見ながら、普段組んでないところと、組んでやってみるっていう頭で考えてみるとか、普段は力を借りてなかったけど生協と組むとか何とかと組むとか、企業とやってみるとか、手段のところでも主体のところでもやると、全く行政にない発想がぼんと入ってきたり、あるいは、企業のパワーとか、大学のパワーとか

を借りられて、さっき高校生とかで入ってくるっていうあれも、多分その一例だと思いますけどそういうのをやると面白いんで、中身と手法のところでこういうことやってみたらもしかしたら面白いんじゃないかなって思います。

(知事)

普段組まない人と組んでみるっていうのはおもしろそうですね。これ、もっともっとやらなきゃいけないなと思いますよね。

(村木氏)

化学変化が起きることがあるらしくて、すごく面白いらしいので、チャレンジするといんじゃないかと思ってるんですけど。

(知事)

行政、ちょっと臆病になりがちというか、やればやれるのかもしれませんが、ちょっと十分出来てない。

(村木氏)

はい。知事は政治家でいらっしゃるからそんなことないですけど、私なんか役人だったからやっぱり頭がですね、行政としては何をやらなきゃいけないか、行政としては何をできるかっていうことをやっぱり考えちゃうんですけど、もうやめて6年たってすごく無責任になってくると、いや、みんなで何ができるかって考えたほうがいいんじゃないのってやっと思えるようになってきて。

(知事)

それはやっぱりやめないと思えないんですか。

(村木氏)

いやいや、だから今現役の人にですね、私はやめてからしか気がつかなかったけど、皆さんは今気がついて一緒にやったらどうですかねえっていうのを、できるだけ言うようにしてます。

(知事)

ただ先ほど一部触れていただきましたけど、行政の例えばリソースも限られてたり予算も限られてるときに、いろんな人と組んでやるっていうのって、やっぱり手段ですよね。そうだと思います。特に今回のコロナ禍の中でも、外国人県民はどうしてるかなあっていうのも意識したんですよ。外国人の学校とか。ちょうどその前にどんどん技能実習生とか入れるっていうのをやってたんですけども、コロナになってみんな困っちゃってて、やはりそういうことにももっともって目を向けた行政にしないといけないなあと思ってるんですね。

(村木氏)

外国人のところはわりとそれに強いNPOがいるので、そういうところと組みながらとか。行政が一からやろうとするとなかなか厳しいですよ。

(知事)

おっしゃるとおりですね。国際協会とか、いろんな人たちと組んで今やっています。

あの、滋賀県にはですね、ミスター福祉と言われてる市川っていうのがいるんですよ。ちょっともうしゃべりたくてうずうずしていますので。

(市川 健康医療福祉部長)

いえいえ、ありがとうございます。

感想めいたことになりますけど、今日、先生にお話しいただいた9個のキーワード、改めてやっぱりこういう視点で取り組まなきゃいけないなと思いましたし、やはり私も公務員ですので、公助ということですが、やはり行政がやらなきゃいけないかっていうことにどうしても力入ってしまいますけど、さっき熊谷先生のお言葉もありましたけど、自立っていうのは依存していくと。だからみんなでやっていくんだっていう、そこすごく大事だなと思ってまして、やはり、来年度に向けて、例えば居場所づくり、みんなで、行政がつくるとか民間がつくるとかっていうのじゃなくて、いろんな居場所づくりを、力入れてやっていかなきゃいけないなということと、あと相談ってすごく大事だと思うんですけども、やっぱりハードルが低いといいますか、誰でもどこでも相談できる、そういう場所を、行政だけがつくるんじゃなくて、いろんな相談場所をつくっていくということで居場所と相談場所をたくさんつくることでですね、こういう難しい課題に対応していけるんじゃないかなと思います。

(村木氏)

ありがとうございます。私、日本の公的な相談支援は、JKビジネスのスカウトのお兄さんに負けてるって言われて、本当に反省したんですけど、千葉の社会福祉法人の理事長の飯田さんっていう若い経営者が、「緩くて抽象的な相談窓口」「ふらふらしているソーシャルワーカー」「シェルターがあって、体を使って働く場所がある」、これからの相談機関の必要な装備はその辺りだって言われて、すごく納得したんですよ。

いずれにしても居場所と相談っていうのが入口になって、入口で捕まえないことには、そのあとの施策につながらないので、それが進んだらさらに滋賀はすごくなるなと思いました。

(知事)

その辺りの相談窓口の敷居がちょっと高いんですかね。

(村木氏)

そうですね。だから、居場所的なものがうまく相談につながっていくとか、そういう感じがいいんでしょうね。

(知事)

あと村木さん、最後にね、今日のお話の中で、望まない妊娠のところにちょっと注目してみたらどうですかっていうのと、最も孤独な人は、と言って40代・50代・60代の男性対策、このあたり、より力入れたいなと思いつながら聞いてたんです。この二つのことでね、村木さんが今、現職の局長・課長だったら、どんなことを企画していこうと思われませんか。

(村木氏)

そうですね、実は孤独・孤立担当でこの中高年男性問題どうしようかって思ったんですけど、もしかしてこれ、わりといけるかなと思ってるのは、健康経営ってありますよね。リンダ・グラットンが、人生100年時代に必要なのは、健康と、人間関係と、それから学び続けることだって言って、これは企業にとってもプラスになることで、実は普通のサラリーマン生活の中で、会社の外の人間的な関係をどんどん細らせてるっていうのが非常に人生100年時代にとってはまずいんだっていうことがわかればですね、健康経営の指標とか柱の中に、企業が普通に前向きに、かわいそうな人対策ではなくって、うちの社員がずっと元気であるためっていう前向きな対策の中に、人間関係を細らせない、そういう対策をやってもらうっていうのは、前向きでいいかなあと。企業さん、わりと健康経営という言葉には反応してくださるので。

(知事)

確かにそうですね。今、経営者の皆さん、企業の皆さんも健康経営、持続可能性っていうのは追求されてますので。そういうところからアプローチしてみるっていうのも大事ですね。

(村木氏)

孤独・孤立っていうと絶対自分は対象者じゃないと思っておられるので、企業さんも。社会的に成功してる男性ほど多分そうなので。

(知事)

「実は私かも」って思う視点って大事なんですよね。でもちょっとなかなか行きにくいっていうのもあるので、ちがうアプローチがあったほうがいいのかもしれない。

(村木氏)

そうですね。プライドが傷つかななくて、でも、大事なことがうまく入っていくようなアプローチの

仕方がいかなあって今思ってます。

あと、望まない妊娠はどうするのかなあ。

(知事)

教育ですか。

(村木氏)

本当は教育なんですけどね。

(知事)

産婦人科医へ行くのはもう既に妊娠を考えてる人とかですよ。

(村木氏)

そうなんです。本当は教育で。OECDの中で、健康とか性とかって問題についての知識を国際比較すると、トルコと日本が最下位なんです。正しい知識を持ってないって。だから、ものすごくそこが後進国なので、例えば、望まない妊娠をしない性教育ってしちゃうんだけど、それってまるでやっぱりそういうものがタブーだったり嫌なことだったり、リスクっていうふうになってますけど、そうじゃなくて自分の人生設計の中のプラスのとっても大きなイベントとして、女性も男性もそれを位置づけられるような教育のほうが本当はいいと思うんです。とっても豊かで、子どもを持つことが幸せでっていうふうになるのが一番大事ですから、やっぱり一つはそういうベーシックな教育のところ、もう一つは、妊娠 SOS とか今相談がありますけど、早くに相談して例えば緊急ピルみたいなことって、その日にすぐ相談すればピル処方してもらえるんだっていう、そんな知識も一方で必要な気がします。

(知事)

そうですね。自分を守る、大切にするっていう意味においても。

(村木氏)

そうですね。人を大切に教育っていうのは、ちゃんとしてあげると、虐待を発見するとかいろんな意味でも、多分プラスに働くかなあって思います。

(知事)

そうですね、ありがとうございました。まだまだ、お聞きしたい、お話ししたいことあるんですけど、いただいていた時間過ぎちゃいまして。いろんな視点からお話いただいたこと、感謝いたします。またぜひ機会がありましたら、お話ししたいと思いますのでよろしくお願いします。

(村木氏)

本当にありがとうございました。

(知事)

楽しみにしています。ありがとうございました。